

子どもの本と子ども時代

森内 寿美子

読み聞かせている絵本や児童書が子どもにどんな影響を与えているのだろうか?というの、誰も知りたいところだ。科学本なら「見つけた」とか「やってみた」と子どもから聞くこともあるが、物語となると、はっきりとしたことはわからない。3人の子どもに12年間読み聞かせをしても、私が知れたのは1つきりだ。5年生の息子が友だち家族に釣りに連れて行ってもらった時、上野駅でみんなに付いて電車に乗ろうとしたら目の前でドアが閉まった。その瞬間、『きしゃにのったピニ』(野間垂太子作 石踊紘一画 福音館書店)が頭に浮かんだという。ホームに取り残されるインドの子どもの話で、3才の時に読んでやったきりの絵本。息子はその話のハッピーエンドもひっくり返して思い出したのだろうか。落ち着いて対処できたらしい。幼いころ読んだものは心の底に沈んでいて、いざというとき浮かび上がってくるものなのかとちょっと驚いた。

でも、このように子どもから聞くことはまれだろう。しかし、読み手である大人の私が、絵本や児童書、昔話からどんな影響を受けたかは、はっきりと言うことができる。子どもの本は私に、子どもというものがどんな生き物なのかを教えてくれた。子どものそのときどきの時間がどんなにかけがえのないものなのか、考えるよすがとなってくれた。

例えば、『もりのなか』(マリー・ホール・エッツ作 福音館書店)や『ジュリアスはどこ?』(ジョン・バーニンガムさく あかね書房)を読めば、空想することは子どもの生きることそのものだとなちまち納得できるではないか。だから、子どものごっこ遊びにはとことん付き合った。『ぼくたち ともだち』(ヘルメ・ハイネ作・絵 佑学社)では、友だちといっしょ

にいたときの幸せがしみじみ思い出された。だから、お泊り会も何回となくやった。『きょうは みんなで クマがりだ』(マイケル・ローゼン再話 ヘレン・オクセンバリー絵 評論社)を読めば誰だって冒険したくなる。「今日はスーパーまで冒険だ!」と子どもたちと一緒に歩き出した方がいいが、道に迷い2時間もかかったうえ雨まで降ってきて、図らずも絵本と同じ結末となった。

その後、『エルマーのぼうけん』(ルース・スタイルス・ガネットさく 福音館書店)『やまし村の子どもたち』(アストリッド・リンドグレン作 岩波書店)『がんばれヘンリーくん』(ベバリイ・クリアリー作 学研)と続けば、子どもたちは当然、作品中の精神をわがものとして行動し始める。木登り、屋根登り、お化け大会、集会所で演劇会、団地お助け隊…。私の方も、そんなことをやりたがるのが子どもだからと、はらはらしながらも見守ることになる。さすがに5年生の男の子だけでキャンプしたときは、お母さんの一人は心配で眠れなかったそうだが、こっちは『二年間の休暇』(ジュール・ベルヌ作 福音館書店)に比べれば!と思ってしまう。本人たちは、岩から川に飛び込んだりして心底楽しんだらしく、息子は帰るなり、「青春は終わった!」とのたまうた。

しかし、親はヘンリーくんの母親になることはできても、禁煙先生(『飛ぶ教室』エーリヒ・ケストナー作 岩波書店)にはなれない。子どもが思春期にでもなれば、寝太郎のじじばばのように見て見ぬふりをするしかない。どこかで、松葉杖のおじさん(『ぼくは松葉杖のおじさんと会った』ペーター・ヘルトリング作 偕成社)にでも会ってくれることを期待して。その辛い忍耐を支えてくれたのも、児童書と昔話だった。

これが、学校となると、どういうことになるのかわからないが、子どもに本を手渡すことは、そのときどきの子ども時代もいっしょに渡すことだと、私は思っている。

(もりうち すみこ: 翻訳家)

児童の学びを支えるために

—この1年を振り返って—

小郷原良美

田井小学校の校舎3階にある図書館は東西に広い窓があり、とても見晴らしがよい。正門に面した東の窓からは学区が一望でき、朝夕の登下校の様子や、休み時間に児童が運動場にかけていく姿がよく見える。図書館に訪れた児童たちと、それぞれの家が見えるかどうか一緒に探すのも楽しい。建物に隠れて見えないが、町の向こうには瀬戸内海が広がっている。西側の山手には学校に沿うように走る線路があり、図書館の窓の高さからは田井駅が目に見える。小さな無人駅で本数は少ないが、電車好きには絶好のスポットだ。ここ数年、入学前の園児たちが学校体験に来る際には電車が出てくる絵本を読み、この図書館からは毎日電車が見られるよ、と紹介することになっている。すると何人かは目を輝かせ、電車に乗ったことあるよ！と楽しげに話してくれる。今年度は感染症の影響で学校体験ができなかったので、新入生が入学してきたらまた紹介したいと思っている。線路を越えて山を登れば森林公園があり、3年生の児童は季節ごとに通って四季の自然を観察している。海と山に囲まれ、自然からも学ぶことの多い本校の図書館では、身近な生き物や植物の本、そして釣りの本がよく動く。

今年度は一斉休校から始まり、例年にない1年となった。登校が再開されてからは感染症対策下での学校生活に気を遣う日々。学校図書館の利用についても毎日のように管理職や養護教諭と相談し、他校の学校司書ともメールや電話で情報交換をしながら対策を行ってきた。

基本的には学校全体の対策に留意しつつ、開館や貸出は通常通り行うことにした。オリエンテーションで伝えた図書館のきまりには、「読む前と読んだあとには手を洗う」という項目を増やした。読み手の周りに集まって座るいつも

の読み聞かせスタイルはやめ、児童を自席に座らせたままで読み聞かせを行った。小さな本はモニターに投影して見てもらうこともあった。当初、マスク越しの読み聞かせは酸欠で倒れるかと思うほど息がしづらく大変だったが、1年続けるうちに肺が鍛えられたのか、息の仕方のコツをつかんだのか、あまり力まず声を出せるようになった。しかし、近くに集まって聞く場合と比べるとどうしても臨場感や一体感が薄れてしまっている気がして、この点はまだまだ試行錯誤中だ。

断続的に休校が入り、自宅で過ごす日も多い中で、少しでも学校図書館の様子を知ってもらいたいと考え、今年度は特に図書館だよりの内容充実には力を入れた。年度初めには、教職員が新しく図書館に購入する本を選んで様子や、ボランティアと一緒に図書館の飾り付けや整備をしている様子を紹介し、登校した際に期待を持って図書館に訪れてもらえるように呼びかけた。また、春休み以降、多くの出版社や図書館、博物館、美術館などが児童生徒のためにデジタルコンテンツを提供してくれていたの、自宅にいながら楽しめる電子書籍やデジタルミュージアムなども積極的に紹介した。さらに、このような時だからこそ大切にしてほしいメディアや情報との付き合い方については、定期的に記事を書いたり関連資料の紹介をしたりした。図書館の掲示板にも新型コロナウイルス感染症について、その時点でわかっていること、気をつけなければならないことなどをまとめた掲示物を貼り、感染症を扱った資料や物語の紹介もした。

ガラリと変わった生活スタイルに不安を感じたり、疲れたりする児童も多かったと思う。学校図書館は、学びの場であるとともに、児童が

ほっと一息付ける居場所でもある。感染症に関するコーナーを作る一方で、季節の展示や、児童が密にならない形で参加できる読書クイズなどの小さなイベントは続けて、いつも通りの日常を感じてもらうことも心がけた。休み時間にふらりとやってきて、少しの時間静かに本を読んだり、本を借りるついでにちょっとした世間話をしたりしてまた教室へ帰って行く児童の様子に、私自身も日常のありがたさを感じて癒やされた。

2学期になると非日常だった感染症対策にも少しずつ慣れ、クラスごとの図書の時間や調べ学習は注意しつつも比較的いつも通りに行えるようになった。図書館としては、できるだけ児童が接近しないように、調べるための資料を多く準備することに苦心した。毎年中学年に行っている百科事典の使い方の授業も、今までは3、4人で1冊使っていたものを、他校から複数セット借り受けて一人1冊手元に置けるようにして説明した。学校図書館を結ぶ物流がないので、学校司書があちこちの学校を駆け回って大変ではあったが、やってみると一人1冊の方が児童それぞれのペースで引くことができ、授業内容も充実したものになった。感染症対策で校外学習や外部の人を招いての体験学習が縮小されたためか、図書館資料を使った調べ学習の依頼は例年より多かった。複数の学年で調べるテーマと時期が重なってしまうこともあり、学校図書館の資料だけではどうにも足りず、公共図書館の学校向け貸出にお世話になった。感染症対策下の開館で大変な時期であったにもかかわらず、毎回丁寧に相談にのってくださり、惜しみなく資料を提供してくださった公共図書館のみなさんには本当に感謝している。

学校では感染症対策と同時進行で、GIGAスクール構想に関わる整備も進んだ。本校では3学期になって児童用のタブレットが届き、これからどんどん活用していこうと職員研修を重ねているところだ。学校図書館としては児童の学習環境が大きく変わることに不安もある。しか



1年生がお気に入りの本でマイしおりを作っている様子

し、自宅では動画やゲームを楽しんでいる子どもたちも、図書の時間に読み聞かせをすると食い入るように話を聞き、物語の世界に浸っている。ゆくゆくは電子書籍の導入も検討することになるかもしれないが、ページをめくる感覚や重さ、読んでくれる人の声や仕草など、今のところは紙の本でしか体験できないものも多い。調べ学習にしても、インターネットで知りたい情報、正しい情報を得るには高度なスキルが必要になる。目次や索引が整理されており、小学生向けに易しくまとめられた本を使って調べる経験を重ねることが、インターネットを上手に使う近道にもなると思っている。環境の変化によってアナログなものが全て無くなるのではなく、必要なものは残し、それに新しい技術や学び方に合ったものを柔軟に追加していけばいいのだと考えることにしている。

学習の手段が変わっても、学校図書館が本やあらゆる情報と児童生徒をつなぐ場であることは変わらない。学校図書館は、本やその他の資料を通して地域や時代を超えた広い世界、多様な価値観と出会い、想像と創造の種をたくさん得られる場所でありたいと考えている。学校図書館が何のためにあるのか。児童生徒の学びを支えるために、学校図書館として何ができるのか。この1年の変化は、私にとってこれからの学校図書館を考えるよい機会となった。

(おごはらよしみ：岡山県玉野市立田井小学校)

小学校の図書館には妖精がやってくる

菅原しずか

「先生来たよ。」毎日のように図書館にやってくる1年生の男の子がいる。今日はシャボン玉の本を探しに来たらしい。一緒に探して手渡すと、「やったあ！」とガッツポーズが出る。

中学校司書として20年以上勤務してきた。衝撃的な可愛さを連発する子どもたちは、私には“妖精”のように見える。好奇心旺盛な妖精たちに囲まれる日々…。昨年春、私は小学校司書1年生になった。

賑やかな業間休みにやってくるのは、児童だけではない。忙しい授業の合間に立ち寄った先生の授業計画を聞き、私はまた別な衝撃に襲われる。「急な相談ですみません。1学年でシャボン玉をやるので、シャボン玉の本ありますか」「先生、さっき“妖精”がシャボン玉の本、借りていきました。他にもあるか探してみますね。」

あやとりの本でも同じことがあった。教室で学習の予定を知ると、“妖精”は先生より先に来て、いつも“旬な本”を借りていってしまう。“妖精”は、私が読み聞かせをするために準備している本にも関心があるらしい。

「先生、ネッドくんいつ貸してくれるの?」「他のクラスで読んだら。予約する?」とカードを渡すと、『よかったねネッドくん』（レミー・シャーリップ作／偕成社）の予約を完了してガッツポーズ。よかったね!

初めての読み聞かせは、分散登校期間に行ったオリエンテーションの時で持ち時間は20分。利用案内の後、低学年には短いお話、中学年には詩、高学年には俳句を何とか紹介できた。

7月初旬、図書館入り口の竹飾りには、色とりどりの短冊が揺れている。「お金持ちになりたい」「たくさん本が読めますように」などの願いに混ざり、「いっぱい生きられますように」「コロナウイルスがなかったことにしてくださ

い」と書かれた短冊を見つけた。健気な言葉に、切ない気持ちになる。たとえ40分の短縮授業でも、図書館が楽しいと思えるよう、図書時間を最大限活用しよう。感染対策に気を付けながら、お話の部屋での読み聞かせを開始した。

まず、七夕の絵本を学年別に何種類か用意して、『ぼちぼちいこか』（マイク・セイラー作／ロバート＝グロスマン絵／偕成社）や『こんにちワニ』（中川ひろたか作／村上康成絵／PHP研究所）と組み合わせた。手遊びも入れると、児童との距離がぐっと縮まるのがわかる。

秋の読書月間は、図書委員と先生方も読み聞かせをしてくれた。私は昔話に力を入れ始めた。アニメ映画の影響か“鬼”が登場するような昔話に、児童は興味津々である。『なら梨とり』『子どもに語る日本の昔話③』（こぐま社）では「行くが行くが行くと」という言葉に、二人の男子が腕を振りながら話についてくる。「岩の上のばあさまにもらった刀をびらりと抜いて、切りつけた」場面では、腕を振り下ろして魔物を仕留める動作が見られた。鬼や山姥が出る昔話への興味関心、傾聴時の集中力の高さは、しばらく継続するだろう。面白いもの好きな“妖精”は、そんなことも気づかせてくれる。

『はなのあなのはなし』（やぎゆうげんいちろう作／福音館書店）も反応が良かった。鼻の働きを知り、マスクが必要な理由が解った児童もいただろう。読み終わりに「大切な鼻のあな、しっかり守りましょう」と、裏表紙の鼻の絵を手で覆うと、鼻マスクだった子が慌ててマスクを直す。その様子を見ていた子からダメ押しの声。「とってもいい本だと思う!」

雪の多かった冬に大活躍したのは『はたらきもののじよせつしゃケイティー』（ヴァージニア・リー・バートン作／福音館書店）である。

大雪で高速道路に立ち往生する車の新聞記事を見せながら、除雪車を紹介する流れにした。読んでみると「はたらくくるま」「町探検」「地図と方位」「自然災害」などの授業で学ぶような内容を、楽しく味わえる絵本でもあることに驚いた。絵が細かく、大人数の場に向かない心配もあったが、ケイティーの目覚ましい活躍に「かっこいい!」という声上がる。タイミングやプログラムを工夫して読み続けたい。ケイティーの言葉が、心に残った。「やめるものですか」。

『ふゆめがっしょうだん』(富成忠夫・茂木透 写真/長新太 文/福音館書店)を読んだ時

の児童の反応も、忘れられない。「木の芽が顔に見えるかな?」と問いかけながら読むと、顔を見つけて手を上げる子がいる。自分自身が木の芽になって、両手をバンザイしている子もいる。木の芽の顔を「スルメ!」「ロバ!」と例える子に、「パツ、パツ、パツ、パツ」と呟く子。

そして、読み聞かせが終わると「パツ、パツ、パツ、パツ」と呟きながら教室に帰っていく…。その後ろ姿を眺めながら、心の中で呟く。「みんなは、みんなは、きのめだよ」いや、やっぱり「妖精」かな。

(すがわら しずか:千葉県市川市立信篤小学校)

DMかたるく

万葉集から学ぼう!日本のことと言葉*全4巻
上野誠監修 花村えい子絵 32頁各3000円
AB判カラー総ルビ

① 古代の都
② 奈良の都
③ 万葉の恋うた
④ 万葉の旅うた

万葉集の「日本のことと言葉」を、叙情ゆたかな絵とわかりやすい解説で味わう四冊。
小学生から楽しめる! 令和の絵本

姉妹編
令和のこころ
万葉の世界と梅花の宴
上野誠著 花村えい子絵
AB判カラー総ルビ
32頁2800円



ミネルヴァ書房 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 ※価格税別

伝記 世界の思想家から学ぶ
未来を生きる道しるべ
道徳の学習教材、調べ学習に
最適の新シリーズ!!

好評



全5巻/揃え価格本体 10,000円+税
セット ISBN 978-4-389-50107-5
分売価格:各巻 本体 2,000円+税
A5判 各152頁

清水書院

ネコ博士が語るふしぎ
完結セット (全4巻)

ドミニク・ウォーリマン文
ベン・ニューマン絵

ネコ博士が語る シリーズ

- ① 宇宙のふしぎ 日暮雅通訳 山崎直子 日本語版監修
- ② 科学のふしぎ 田中薫子訳 米沢富美子 日本語版監修
- ③ 体のふしぎ 野口絵美訳 茨木保 日本語版監修
- ④ 海のふしぎ 田中薫子訳 保坂直紀 日本語版監修

科学のことがなら
ネコ博士におまかせ!



小学校中・高学年~ 30cm ●セット定価10120円 (10%税込)

徳間書店 〒141-8202 東京都品川区上大崎3-1-1 目黒セントラルスクエア
TEL.049-293-5521(受付センター) https://www.tokuma.jp/kodomonohon/

わたしたちの暮らしは環境問題とつながっている!
地球の未来を考える SDGs ビジュアル絵本
気温が1度上がると、
どうなるの? - 気候変動のしくみ -

監修 竹内 薫 サイエンス作家
オールカラー

シュライバー 文 マリアン 絵 松永美穂 訳



定価2090円
(本体1900円+税)
ISBN 978-4-86706-017-9

西村書店 〒102-0071 東京都千代田区富士見2-4-6
☎ 03-3239-7671 Fax.03-3239-7622 (税込)